野麦峠を越えた製糸工女たち

（日本労働ペンクラブ「労働遺産検討会」）資料

長野県・岐阜県境に建つ記念碑と乗鞍岳

はじめに

日本アルプスの南端、日本百名山の一峰乗鞍岳（３，０２６ｍ）の南に連なる稜線、標高１，６７２ｍに野麦峠がある。

この野麦峠を時代背景の中で、それぞれの目的をもって幾万の人々が行き来した。近代日本の基礎を作り始めた明治に入って、一つの目的のために集団でこの峠を越えた人たちがいた。製糸工女である。

製糸工女という職業に焦点を当て、その時代背景や国情、製糸工場の実情などを、地道な取材を通して書き上げた山本茂実先生の小説「あゝ野麦峠」を基に、私見も交え、この時代を担い生き抜いた人々のささやかなおもいに触れてみたい。

野麦街道の変遷

野麦峠を通る道の歴史は古く、開削は鎌倉時代にまで遡る。江戸時代、幕府の天領だった飛騨高山と江戸を結ぶ公道として行き交う人も多く、当時は高山から野麦峠を越え、奈川寄合渡南に向かって境峠を通り、木曽藪原にて当時としては中部縦貫道ともいえる中山道と交わり、江戸へと続いていた。

この道の路程は、ほとんどが山中を縫うように通っており、深い雪に見舞われる冬など、行き交う旅人は峠越えに難儀したという。物資の輸送も同様で、６尺幅の道を、牛の背に荷物を括り付け奈川谷から上州倉賀野まで、曲げ物や割り板などを運んだという記録も残っている。

石室内部

石室（いしむろ）は冬の野麦峠越えで行き交う人を遭難から守るため造られた。

明治４年（１８７１年)、廃藩置県により筑摩県（明治４年１８７１年）の県庁が松本に置かれ、その支庁が高山に設けられたことにより、野麦街道往還は盛況を迎えることになる。

このころになるとこの道は梓川沿いに松本に出るルートが一般的になり、飛騨ぶりをはじめとした物流はこの道を使うこととなる。

飛騨からの工女が歩いた道

古川（現飛騨市）⇒高山⇒野麦峠⇒波田⇒広丘⇒塩尻峠⇒岡谷

明治９年（１８７６年）筑摩県は長野県に、飛騨は岐阜県になり長野県の蚕糸生産量は全国一となる。

明治４４年（１９１１年）中央西線、続いて翌年には中央東線が全通。昭和９年（１９３４年）には国鉄高山線が全通し、野麦峠を越える人々は激減する。その後、野麦峠道は深い笹に埋め尽くされ、地元の猟師や山仕事を除き、行き交う人は皆無となった。

野麦峠を行き交う工女たち

絹糸を生産する工女たち。キカヤといわれた製紙工場が林立する諏訪湖畔に近隣の郷村はもとより、県内外から多くの若い女性たちが集められた。なぜ若い女性だったかというと、繭から細い生糸を引き出すのに、細くて柔らかな指先が何よりだったからだ、ともいわれている。

明治１２年（１８７９年)、長野県が全国の製糸工場の半数以上を占めるに至り工女の不足もあって、山深い奥飛騨まで募集の手が伸び、少女たちが諏訪湖畔へ出稼ぎに行き始める。

奥飛騨山中から諏訪湖畔まで百数十キロの路程といわれる野麦街道のうちでも、峻険な野麦峠越えは、諏訪湖畔を行き交う多くの工女たちにとって最も難所であった。

彼女たちは何をおもい、野麦峠越を繰り返したのだろう。

糸引き歌の一節に、「はぁ～野麦峠はだてには越さぬ　ひとつぁ～　身のため親のため」と謡われている。私はこの一節が工女たちの気持ちを表わすすべてではなかったかと考えている。

小説「あゝ野麦峠（ある製糸工女哀史）昭和４３年（１９６８年）朝日新聞社刊」の中で、読者の涙と同情を誘った一幕は、飛騨は河合角川の出で、百円工女ともいわれた政井みねが野麦峠で死去した場面だ。

彼女は諏訪湖畔では大手の製糸工場、山一製糸の優良工女で、実家に多くの富をもたらした人だったという。その彼女が明治４２年（１９０９年）工場就業中に病に倒れ、いよいよ不治となった秋、引き取りに来るようにとの電報をもらい、迎えに行った兄に背負われ、5泊の道中を何とか忍び、野麦峠で飛騨の空を仰いで「ヒダガミエル　ヒダガミエル」とうめくように叫んで息を引き取った、という。政井みね　明治４２年１１月２０日没　享年２０歳

石碑裏面

野麦峠から少し登った眺望が利く場所に昭和４５年（１９７０年）兄辰二郎が願主となり女優吉永小百合さんの寄付で建立

政井みね、辰二郎の碑
平成元年愛知県の篤志家が寄贈建立

野麦峠を再び世に出した山本茂実

山本茂実先生は松本市出身の作家（１９１７年～１９９８年）である。おそらく、作家を志したころから反骨というか、反体制というような志を秘めての作家活動ではなかったか、とおもわれる。戦後から野麦峠にまつわる、とくに製糸工女たちにかかわる気長な取材を通じて、結果、富国強兵の礎を築いた製糸工業を、そこに働く工女たちを主人公に書いた（「あゝ野麦峠」ある製糸女工哀史）昭和４３年（１９６８年）が、大ベストセラーとなり、クマザサに埋もれた野麦峠は再び脚光を浴びることとなる。

昭和４３年（１９６８年）１０月、野麦峠県境に「あゝ野麦峠」の碑が建立される。揮毫は元朝日新聞社論説委員の荒垣英雄先生。山本茂実先生の強い働きかけがあって、地元自治体がこれに呼応して建立されたものだといわれている。

山本茂実を偲んでの石碑
平成１１年（１９９９年）氏の功績を称え、旧道口に村が建立

野麦峠の盛衰とその歴史と文化を伝える取り組み

野麦峠は小説「ああ野麦峠」の刊行以降世間の注目を集め、映画にもなって峠を訪れる人たちで賑わいをみせた。地元青年団による演劇もその一役を担ったと思う。

昭和５８年（１９８３年）地元婦人会の皆さんが工女に扮し、峠道を歩く第１回野麦峠祭りが開催された。以来今年まで少年少女たちが主役に変わり、往時を偲び、歴史の学習の場として、野麦峠祭りは続いている。

また、県の史跡ともなっている旧野麦街道を維持していくため、定期的な道整備を行っている。

しかし、平成９年（１９９７年）国道１５８号安房トンネルが開通以降、野麦峠を通過する車両・人は激減し、峠にかかわる施設の維持は困難な状況となってきている。

こうした中、野麦峠にかかる歴史・文化遺産を守り後世に伝えていくために、旧道の補修整備や記念碑等の維持保存、地元からの情報発信を永続していく必要があり、私たちはその地道な活動を担っていかなければならないと考えている。

野麦峠にかかる石碑等

・県境の記念碑　「あゝ野麦峠」　昭和４３年（１９６８年）１０月建立
・政井みね慰霊碑　昭和４５年（１９７０年）５月建立
・旧道１，３００ｍが長野県史跡に指定　昭和５９年（１９８４年）３月
・お助け観音像　昭和６３年（１９８８年）９月　篤志家寄贈建立
・乙女地蔵尊　昭和６３年（１９８８年）１０月　村内外・関係者の寄付建立
・政井みね・辰二郎の碑　平成元年（１９８９年）篤志家寄贈建立
・山本茂実を偲ぶ碑　平成１１年（１９９９年）奈川村において建立

おわりに

野麦峠を越えた数多くの工女たち。彼女が私たちに残したものは何だったのか。激動の時代の始まりの中で何のために峠を越えていったのか。私はそんなおもいを胸に峠道を歩く。

絹糸を輸出して軍艦を買い、さらなる国力と軍事力の増強を図って天然資源確保のため海外進出に邁進する日本。むせるようなくそ暑いキカヤの中でひたすら糸を引く製糸工女にそんな国情など知る由もなかったとおもう。

若き乙女たちが、過酷な労働に耐えたのはなぜか。雑穀で暮らす家族を助ける孝行と愛、そして自らも、山国とは違う活気ある街で暮らす憧れと、向上心が彼女たちの精神を支えていたのではないかとおもう。

奥原仁作略歴

昭和２５年（１９５０年）生まれ　林業を営む父の背中を見て育つ
昭和４４年（１９６９年）４月　高校を卒業して村役場に就職
平成１７年（２００５年）４月　奈川村は松本市に合併
平成２３年（２０１１年）３月　合併した後松本市職員を退職
平成２３年（２０１１年）４月　自然公園財団上高地支部就職
平成２８年（２０１６年）３月　同財団を退職
平成３０年（２０１８年）５月　（株）ふるさと奈川 設立 代表取締役就任
現在に至る